上演６ ２０２５年7月２７日（日）１校目 北海道ブロック 北海道網走南ケ丘高等学校 「はしれ、たくしぃ！ 」	第４９回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第７１回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会　担当委員 秋田県立秋田明徳館高等学校 鎌田　知花

夢を追いかける登場人物たちが、悩みながらも自分なりの幸せを見つけていく、将来の夢と人生のあり方について考えさせられる作品であった。

主人公である拓志は、高校卒業後に役者を志して上京したが上手くいかず、8 年の年月を経て帰郷し、タクシー運転手となった。そんな拓志は、業務の中でたくさんの個性豊かな乗客と出会う。後に妻となる高校の頃の同級生、進路に悩む女子高校生……そんな人々との出会いと、結婚、子どもの誕生と成長、タクシーの故障、退職など、様々な出来事を通して拓志とタクシーの人生が描かれる。拓志の退職の時に運転の代行を買って出たのは、かつて、入社式に遅れそうになった新入社員の男だった。拓志の世話好きで人情味の溢れる人間性があったからこそ、巡り巡って自分に幸せが返ってくる。そして、人を思う気持ちがあるからこそ出る「ありがとう」という言葉が、お金を貰う運転手側からも、お金を渡す乗客側からも飛び交う。そんな素敵な出会いと別れの一部始終を観客として観ることができて、心が温かくなった。

「挫折や回り道は、あっていい」、「人生、山あり、谷あり」、「どこ走るかわからないから楽しいんだよ」という数々のセリフの中には、人生に間違いというものはなく、夢が叶わなくても幸せはあるということに気付かされ、勇気づけられたという声が講評委員から挙がった。拓志が迷いながらもタクシーと共に自分の人生を走り抜けていく姿から、今を一生懸命生きることが大切であると教えられ、挑戦することに対して前向きに考えてみようと思わされた。

また、劇中にはシュールな笑いどころがたくさん散りばめられていた。例えば、仮面ライダーのくだりや車の表現の仕方など特徴的で効果的な表現が目白押しだった。極めつけは、拓志と香織のデートシーン。華やかなクラシックが流れ、ミラーボールが回り、色とりどりの風船が舞う演出は、まるで映画のワンシーンを思わせるようで、拓志の浮かれている気持ちが観客である私たちにも伝わってきた。

他にも、タクシーを擬人化したかのような 2 人とのやりとりも非常に魅力的で、遊び心のある表現がとても面白かった。これらは、付喪神ではないかという意見も講評委員から出た。愛車を大切にしてきた拓志の物に対する思いやりが伝わってきたからこそ、苦楽を共にしてきた相棒との別れのシーンは観客の涙を誘った。

必ずしも夢は叶うとは限らない。けれども、与えられた場所で花を咲かせ、家族のために走り続けた拓志の人生は、間違いなく幸せだったはずだ。将来に迷う私たちに、エールを届けてくれる作品であった。